

中山で一泊したから、

尾行手帳を『君には見せられないのだが、此んな風に書いてある』と言つて、村ごとつてにかはるんで、何處だつたかの巡査が俺に見せた。

思想上注意人物として、失戀の爲に發狂して監視が嚴重だつた爲に、暴行の恐れありとしてあつた。

大洲から若い刑事と一緒に馬車に乗つた。

宇和島へ戻つたのは三月十七日の日の暮だ。

之からの彼奴の生活は私にはとても述べられない、暗澹たる卑下と、脊髄の痛みと一秒間も眠れない絶望となんだから。

私は彼奴が漸次、思考力も記憶も無くなして了ひつゝある間に、彼奴の過去を、之丈に書き現はしてみた。

彼奴は時々兩手に火箸を持つて、自分の兩方の耳に突つ込まんとする。